

Point 050

- 155 This is in part due to the () demand of society.
 ① grow ② grew ③ grown ④ growing 〈関東学院大〉
- 156 A ship () more than 500 passengers is missing.
 ① carry ② carrying ③ carried ④ is carried 〈大阪学院大〉
- 157 The main languages () in Canada are English and French.
 ① spoken ② spoke ③ speaking ④ to speak 〈愛知工大〉
- 158 手に花を持っている男性に話しかけている女性は誰ですか。
 Who is (a man / with / the / woman / to / talking) a flower in his hand? 〈武庫川女子大〉

Point 051

- 159 There was a parade () by at the time.
 ① has gone ② goes ③ going ④ will go 〈関西外大〉
- 160 There was a frightening sound () in the distance.
 ① hear ② on hearing ③ heard ④ hearing 〈日本大〉

- 155 これは、ある程度は社会の要求が大きくなっているためです。
 156 500人を超える乗客を乗せた船が行方不明です。
 157 カナダで話されている主要な言語は英語とフランス語である。
 159 そのとき、パレードが通り過ぎていた。
 160 遠くの方で、ぎょっとするような音が聞こえました。

Point 050 : 名詞を修飾する分詞(句)

- (1) 分詞1語が名詞を修飾する場合、名詞の前に置く。また、分詞が他の語句を伴って長くなっている場合は名詞の後に置く。
- (2) 修飾される名詞と分詞との間が能動関係(…する/…している)なら現在分詞を、受動関係(…される/…された)なら過去分詞を用いる。

155 名詞を修飾する現在分詞・過去分詞

基本

- ▶ grow と demand of society の間は「社会の要求が大きくなる」の能動関係なので、現在分詞を用いる。
- ▶ in part 「ある程度/いくぶん」、be due to A 「Aが原因である」(→1214)はイディオムとして押さえる。

156 現在分詞句の後置修飾

基本

- ▶ A ship と carry の間は能動関係になるので、現在分詞が入る。
- ▶ more than 500 passengers という語句を伴っているため、carrying は A ship の後に置かれている。

157 過去分詞句の後置修飾

基本

- ▶ The main languages と speak の間は受動関係になるので、過去分詞が入る。
- ▶ in Canada という語句を伴っているため、spoken は The main languages の後に置かれている。

158 分詞が他の語句を伴っている場合一名詞の後

基本

- ▶ 考え方は問題 156 と同じ。the *talking* woman to ... としないこと。

Point 051 : There be S doing / done

この表現はいずれも、整序問題で問われることが多いので要注意。

159 There be S doing

標準

- ▶ 「S+be doing」の進行形とほぼ同じ意味で、**There be S doing** の形をとることがある。単なる進行形よりも、主語を際立たせる表現と理解しておけばよい。

!!注意 **There be S** 構文「Sがある」と同じように、Sには不特定の名詞が来る。

160 There be S done

標準

- ▶ 「S+be done」の受動態とほぼ同じ意味。単なる受動態よりも、主語が際立つ点、およびSには不特定の名詞が来る点は、**There be S doing**(→159)と同じ。

Point 052

161 George looked () when I asked him to sing.

□□□

- ① embarrassed ② embarrasses
③ embarrassing ④ embarrassment

〈金城学院大〉

Point 053

162 The driver kept the engine () while we waited.

□□□

- ① run ② to run ③ running ④ ran

〈日本大〉

163 I cannot keep my eyes () to his terrible situation.

□□□

- ① to close ② close ③ closing ④ closed

〈早稲田大〉

164 I heard him () a song in the bathroom.

□□□

- ① singing ② having sung ③ to sing ④ to be singing

〈桜美林大〉

165 I heard my name () while I was sleeping.

□□□

- ① calling ② calls ③ called ④ call

〈法政大〉

整理 17

「感覚動詞+O+do」と「感覚動詞+O+doing」

いずれも、目的語と目的格補語との間に能動関係が成り立つ点は同じ。

- (1) 「感覚動詞+O+do」一般に、動作の始めから終わりまでが対象(⇒126)。受動態では不定詞になる(⇒127)。

We heard him *sing* that song. → ⊗He was heard *to sing* that song.

(私たちは、彼がその歌を歌うのを聞いた)

- (2) 「感覚動詞+O+doing」一般に、動作の途中が対象(⇒164)。受動態でも現在分詞は変化しない(⇒166)。

We heard him *singing* that song. → ⊗He was heard *singing* that song.

(私たちは、彼がその歌を歌っているのを聞いた)

- * 「感覚動詞+O+done」を使えば、以下の形もありうる(⇒165)。

We heard that song *sung* by him.

(私たちは、その歌が彼によって歌われるのを聞いた)

161 僕がジョージに歌うように頼んだとき、彼は困ったような顔を見せた。

162 私たちが待っている間、運転手はエンジンをかけたままにしていた。

163 私は、彼のひどい状態に目をつぶっておくことができない。

164 私は、彼が浴室で歌を歌っているのを聞いた。

165 寝ている間に私の名前が呼ばれるのが聞こえた。

Point 052 : 主格補語となる分詞

分詞は「S+V+C」の補語、すなわち主格補語として用いられる。主語との間が能動関係なら現在分詞を、受動関係なら過去分詞を用いる。

161 主格補語となる分詞—主語との関係で決定

標準

▶ George と embarrass 「…を当惑させる」の間は受動関係。よって過去分詞① embarrassed が入る。

▶ **プラス** 現在分詞が主格補語となる例は、以下を参照。

She remained *standing* there.

(彼女はそこに立ったままだった)

Point 053 : 目的格補語となる分詞

分詞は「S+V+O+C」の補語、すなわち目的格補語として用いられる。目的語との間に能動関係が成立すれば現在分詞を、受動関係が成立すれば過去分詞を用いる。なお、次頁の問題 166 まで終えた後で、左頁の【整理17】で、感覚動詞を用いた場合の様々なパターンを内容的に理解しておこう。

整理 16 「S+V+O+doing / done」の形で用いる動詞

see, hear, watch, feel, look at, listen to, leave 「OをCのままにしておく」、keep 「OをCの状態にしておく」、find 「OがCであるのに気づく」など。

* 一般に see などの感覚動詞はこの形をとる。

162 目的語と能動関係—現在分詞

標準

▶ the engine と run の間は能動関係。よって現在分詞の③ running が入る。

▶ keep は、keep O C で「OをCにしておく」の意味を表す動詞。

163 目的語と受動関係—過去分詞

標準

▶ my eyes と close 「…を閉じる」の間は受動関係。よって過去分詞の④ closed が入る。

164 hear A doing

標準

▶ him と sing の間は能動関係。よって現在分詞の① singing が入る。

▶ 感覚動詞 hear は原形不定詞を目的格補語にとるので、選択肢に sing があればそれも正答になる(⇒126)。

165 hear A done

標準

▶ my name と call の間は受動関係。よって過去分詞の③ called が入る。

166 She was seen () into the theater with her boyfriend.

□□□

- ① go ② going ③ gone ④ went

〈センター試験〉

Point 054

167 I could not make myself () in English.

□□□

- ① to understand ② understand
③ understanding ④ understood

〈大阪国際大〉

168 The noise in the street was such that I couldn't make myself

□□□

().

- ① to hear ② have heard ③ hearing ④ heard

〈中央大〉

Point 055

169 () from a big city, I don't mind the street noise so much.

□□□

- ① Coming ② To come ③ I come ④ Came

〈清泉女子大〉

170 () what to say, I kept silent.

□□□

- ① Knowing ② Knowing not
③ Not knowing ④ Known

〈常葉大〉

171 () his work, Peter went home and took a long hot shower.

□□□

- ① All finishing ② Finished
③ Having finished ④ Have finishing

〈慶應義塾大〉

172 () that night, we could not observe the moon.

□□□

- ① Having rained ② It was raining
③ It having rained ④ Raining

〈津田塾大〉

166 彼女は、ボーイフレンドと劇場に入っていくところを見られた。

167 私は、英語で話を通じさせることができなかった。

168 通りの騒音がひどかったので、私は自分の声を届かせられなかった。

169 大都市出身なので、私は街の喧騒をあまり気にしない。

170 何を言っているのかわからなかったので、私は黙ったままでいた。

171 仕事を終え、ピーターは帰宅し、熱いシャワーをゆっくり浴びた。

172 その夜は雨が降っていたので、私たちは月を観測できなかった。

166 [S+V+O+doing] の受動態

標準

▶ [S+V+O+doing] (→ 162, 164) が受動態となった形。

▶ 感覚動詞 see は目的格補語に原形不定詞もとるが、受動態にすると to 不定詞になる (→ 127)。よって① go は不可。to go なら正答になる。

Point 054 ∴ make oneself understood / make oneself heard

いずれも [S+V+O+done] の構造の成句表現。

167 make oneself understood 「自分の言うことを相手にわからせる」

標準

168 make oneself heard 「自分の声を届かせる」

標準

Point 055 ∴ 分詞構文

分詞句が副詞句として働き述語動詞などを修飾するものを、分詞構文と呼ぶ。

「時(…するとき)」「理由(…なので)」「付帯状況(…しながら/そして…する)」

「条件(…ならば)」「譲歩(…だけれども)」を表すとされるが、条件・譲歩の用例は慣用的なものを除けば少ない。

また時・理由・付帯状況などは判断が難しい場合も多く、つねに接続詞を用いて「書きかえ」られるわけではない。また、分詞構文は文頭で用いられることが多いが、文中(通例、主語の後)、文尾でも用いられる。

169 分詞構文の基本—現在分詞

標準

▶ 「分詞構文の基本は、現在分詞によって表す」とまずは理解しておくこと。

▶ 副詞用法の不定詞には、感情の原因「…して(うれしい、悲しいなど)」、判断の根拠「…するなんて/…するとは」の意味はあっても、一般的に「理由」を表す用法はない (→ p.52【整理13】) ので、② To come は不可。

170 分詞を否定する語—分詞の直前

標準

▶ 分詞を否定する語は分詞の直前に置く。

171 完了分詞構文

標準

▶ 文の述語動詞の時点よりも「前」であることを表すためには、完了分詞 (having done) を用いた分詞構文にする。

172 独立分詞構文

標準

▶ 分詞の意味上の主語が文の主語と異なる場合、分詞の意味上の主語を分詞の前に置く。この形は、一般に独立分詞構文と呼ばれる。

▶ 本問では「天候の it」が分詞の意味上の主語として用いられている。

173 () in easy Japanese, this textbook is good for school children.

- ① Wrote ② Written ③ Writing ④ To write (大東文化大)

174 All things (), she is still in the wrong.

- ① considering ② considered
③ were considered ④ being considering (札幌学院大)

175 Standing as it () on a hill, the restaurant commands a fine view.

- ① could ② does ③ has ④ was (明治学院大)

176 Generally (), a dog is called man's best friend.

- ① speaking ② to speak ③ spoken ④ speak (駒澤大)

Point 056

177 He lay on the sofa with his () and soon fell asleep.

- ① arms folded ② arms folding
③ fold arms ④ folding arms (センター試験)

178 あなたがそこに立ってては、私は歌が歌えない。

- ① I (a song / can't / standing / with / sing / you) there. (梅花女子大)

整理 18

慣用的分詞構文

- **generally** [frankly, strictly, roughly] **speaking** 「一般的に[率直に、厳密に、大ざっぱに]言えば」(→176)
- **speaking** [talking] **of A** 「Aと言えば」
- **judging from A** 「Aから判断すると」
- **considering A** 「Aを考慮に入れると」
- **weather permitting** 「天気がよければ」

173 やさしい日本語で書かれているので、このテキストは児童にちょうどよい。

174 あらゆることを考えてみても、彼女はやはり間違っている。

175 このとおり丘の上に立っているため、そのレストランは眺めがすばらしい。

176 一般的に言って、犬は人間の最良の友と呼ばれている。

177 彼は腕を組んでソファーに横になり、すぐに眠りに落ちた。

173 受動態の分詞構文

標準

- ▶ 分詞構文は、基本的には現在分詞で表す(→169)ので、以下ようになる。
- ① 受動態 (be done) の分詞構文は **being done** の形
- ② 受動態の完了分詞構文(→171)は **having been done** の形
- ▶ ここで注意してほしいことは、分詞構文では、**be** 動詞の現在分詞 **being**、完了分詞 **having been** は省略されることがあるという点である (having been では、having のみ、been のみの省略は不可)。
- ▶ 本問は **this textbook** が主語だから、**being** を省略した② **Written** を選ぶ。

174 受動態の独立分詞構文

標準

- ▶ 問題 172 と 173 のテーマを融合した問題。文の主語と分詞の主語が異なっているため、独立分詞構文にするが、**consider** 「…を考える」は他動詞であるから、その受動態の分詞構文 **all things (being) considered** の **being** が省略された形を選ぶ。

175 分詞構文の強調形 **as S do**

発展

- ▶ 分詞構文で、分詞を強調する場合、現在分詞の直後に **as S do** の形を置くことがある。この **S** は文の主語に一致する。本問の主語は **the restaurant** なので、**it** が用いられている。

176 慣用的分詞構文—**generally speaking** 「一般的に言えば」

標準

- ▶ この種の表現はイディオムとして覚えてしまうのがよい(→左頁【整理18】)。

Point 056 : 「with + 名詞 + 分詞」の付帯状況表現

「with + 名詞 + 分詞」の形で、付帯状況「…した状態で／…しながら」を表す表現。名詞と分詞との間が能動関係なら現在分詞、受動関係なら過去分詞を用いる。

177 **with A done** の付帯状況表現

標準

- ▶ **his arms** と **fold** 「…をたたむ／…を組む」の間は受動関係。よって、過去分詞を用いた① **arms folded** が入る。

178 **with A doing** の付帯状況表現

標準

- ▶ **can't sing a song** の後に、**with you standing there** という現在分詞を用いた付帯状況表現を作る。

＋プラス 付帯状況の **with** は、「with + 名詞 + 形容詞[前置詞句/副詞]」の形で用いる。以下の例を参照。

- ・ **with one's mouth full** 「口にものをほおばって(形容詞)」
- ・ **with a pipe in one's mouth** 「パイプをくわえて(前置詞句)」
- ・ **with one's hat on** 「帽子をかぶったまま(副詞)」